

## 日本タバコ会社 連載 9

### 田中事務所

佐伯は、権藤と田中の会合のために料亭を予約することを申し出たが、田中は、自分の事務所に来て欲しいと言ってきた。約束の時間の一時間前に、佐伯と権藤は本社ビルを後にした。この時間は、都内が渋滞している可能性がある。余裕をもって出かける必要がある。

「田中議員は、どうしても事務所まで来て欲しいということでした。何かあるのでしょうか？」

「こちらとしても、国会内分煙で労をとっていただいた関係上、礼を失してはいけない。田中先生の意向とあらば、仕方がないだろう」

「ところで、佐伯君。仕事以外の話で申し訳ないが、今度、小枝子とふたりだけで会ってみるつもりはないか」

佐伯は、自分の耳を疑った。権藤は何を言い出すのだ。

「いや、あの後、小枝子にもそれとなく聞いてみたんだ。そうしたら、小枝子も佐伯君と会ってもいいと言っている」

「しかし、私のようなものとは、お嬢様は退屈なさるのではないですか」

「まあ、親ばかといわれても仕方がないが、わたしはあれが可愛くてしょうがない。そのために、わがままばかりを聞いていた。結局、いき遅れて、あの様だ。しかも、大学教授になったのでは、ますます相手がいなくなるだろう」

佐伯は返答に迷っている。

「どうした。小枝子のことが気に入らなかったかな。わがままに育てたから、君にもだいぶ失礼なことを言っていたようだが」

「いえ、とんでもありません。わたしには勿体ないと思っております」

「嫌なら、断ってくれてもいい。」

「もし、お嬢様が嫌でなければ、わたしももう一度、ぜひお会いしたいと思っています」

「そうか。それなら、君から連絡してくれないか。これが、小枝子の携帯番号だ」

権藤は、佐伯に番号を書いた紙を手渡すと、話題を変えた。しかし、佐伯は落ち着いたなかった。あの小枝子に、もう一度会える。それだけで、気が高ぶった。

田中事務所には、約束の時間の一〇分前についた。佐伯が、権藤の到着をつけると、時間前に応接室に通してくれた。民衆党の重鎮にしては、かなり貧弱な事務所の作りであった。金に相当困っているようだ。

権藤は、応接室に田中がはいてくると、立ち上がって、礼を言った。

「先生のご尽力のおかげで、懸案の国会内分煙が実現しました。本当に、ありがとうございます」

「いや、わたしは何もしていませんよ。それに、全面禁煙よりも完全分煙、その方が現実的な解決策だと、わたしも同意しただけのことです」

「しかし、先生の力がなければ実現しなかったのも事実です。今後は、全国の公共施設の完全分煙化と、排煙設備の導入にご協力ください」

「わたしが、動かなくとも、公共施設の分煙化は進められると思いますよ」

「そうですか。いずれ、先生のご協力を仰がなければなりません」

「ところで、本日、権藤さんをお呼びしたのは、これをお返ししようと思ったからです」  
そう言って、田中は、権藤は紙袋を渡した。

佐伯は、あれっと思った。これは、田中に渡した現金である。政治家は、現金が喉から手が出るほど欲しいはずである。それに、この事務所は、明らかにみすばらしい。田中が金に困っていることは明らかだ。にもかかわらず、金を返すといっている。

「権藤さんは驚いたでしょう。わたしの事務所が、あまりにも貧弱なので。でも、これが現実です。世の中のひとは、政治家は悪いことをして金を稼いでいると思っているかもしれませんが、多くのものは、金に困っているというのが現実です」

「先生、ですから、先生の活動資金にして欲しいのです」

「いや、この金は受け取れません。恥ずかしながら、懐に入れようと思ったこともありました。しかし、それでは、わたしの政治信条に反する。金権政治を批判して、いまの民自党を飛び出したのに、この金を受け取ったのでは、民自党と同じことになる」

「そうですか。分かりました」

佐伯は、権藤がもっと粘るかと思ったが、意外とあっさりひいたのには驚いた。

「しかし、先生は政治家の鑑ですな。裏から手をまわそうとした自分が恥ずかしい。今度は、堂々と、先生に献金させていただきます。表から堂々といきますよ」

と権藤は言った。

「それは、嬉しいが、それでは、権藤さん、いやNTSさんに迷惑がかかるでしょう。なにしろ、わたしは嫌煙家です。タバコ会社にとっては、支援などもってのほかでしょ。」

「いや、われわれも正面から行きます。わが社の希望は、完全分煙化です。喫煙者と非喫煙者が互いに共存できる社会の実現。その理想のために、先生に協力いただく。それでいいでしょう」

「しかし、それでは、与党の赤木が承知しないでしょう」

「赤木先生にも正論でぶつかりますよ。それで理解いただけないなら、それは、それで仕方ありません」

「そうですか。さすがに権藤さんですな。やはり立派なおひとだ」

「いえ、わたしは、先生にお褒めいただくほどの人間ではありません」

すると田中はこう言った。

「わたしも、権藤さんのことは少し調べさせていただきました。財産省の事務次官まで登

りつめ、いくつもの組織を渡り歩いた。そして、NTSの社長。お決まりのコース。そんな天下りのひとりと思っていたが、それが大違いでした」

佐伯は、田中が、いったい何を言い出すのだろうかと思った。

「権藤さん。あなたは、退職金のすべてを交通遺児支援機構に寄付されておりますな」

「ほお、田中先生は、どこでそんなことをお調べに」

「わたしにはいろいろな友人が居ります」

「まあ、退職金など、わたしのような年寄りには必要ありません。幸い、一人娘も独立しております。妻にも先立たれました。金を持っていても意味がありません。それならば、少しは世の中のお役に立てればと思って寄付しました」

「それとて、なかなかできることではありません」

佐伯も田中の話に驚いていた。佐伯は、権藤のことを羨ましがっていた。働かずして、大金を手にする。しかし、権藤は、退職金をすべて寄付していたのだ。

田中と権藤は別れ際に、固い握手を交わした。

権藤は言った。

「本物の政治家に出会ったな。今日は、いい気分だ」

と。佐伯は、もっと言い分だった。本物の政治家と、本物の役人に出会えたのだから。

## ダブルデート

佐伯は、小枝子のことをデートに誘うべきかどうか迷っていた。権藤は、ああいつているが、小枝子に電話をかけたら、笑い飛ばされると思ったからだ。実際に、電話をかけたら笑われた。

「それってデートへの誘い？」

「はい、そうです。ただ、もう一組いますが、よろしいですか？」

「ダブルデートってやつ。わたしは構わないわよ」

「でも、小枝子さんを誘うのに、居酒屋というのは気が引けるのですが、完全禁煙ですし、料理も結構うまいのです。それに、勘定はすべて自分持ちですので、ご勘弁下さい」

「そうね。佐伯さんとなら、あまりロマンチックな場所じゃないほうがいいわね」

と笑っている。それは、いったいどういう意味なのだろうか。

佐伯は迷った末に、良治と亜美を誘った。亜美は、いつも家で、まずいものしか食べていないから大歓迎だと言った。良治は、佐伯がどんな女性を連れてくるのかに興味津々といった体である。

小枝子との待ち合わせ時間は午後七時だったが、三人は二〇分前に店に集まった。事前の打ち合わせである。

「亜美ちゃん。良治君。申し訳ないね。こんなことにつき合わせて」

すると亜美は

「佐伯さん。そんなことはありません。だって、わたしたち貧乏なんで、最近はずで食事なんてなかったんです。だから、とても楽しみなんです。それに、ここの店の料理は最高ですよ」

見ると、良治も今日はさっぱりした格好である。どこかの会社員といっても十分通る。とても不良のミュージシャンには見えない。

「良治君も、申し訳ない」

「そんなことはないですよ。俺らふたりは、佐伯さんには感謝しても感謝しきれません。こんなことなら、お安い御用です。しかし、佐伯さんのお相手ってどんな人なんですかね」

「僕にはもったいないくらいの美人だよ。それに、頭もいい」

「へー、そうなんですか。でもわたしは佐伯さんなら女性にもてると思っていましたよ。経理部の女性もみな佐伯さんのファンなんです」

「おい、亜美、まさかお前」

「やだ、良治、妬いているの？」

どうやら、ふたりは、佐伯はそっちのけで、久しぶりの外出を楽しんでいるようだ。良治は言った。

「今日は、おふたりの恋路をじゃましないように、僕らはおとなしくしています」

亜美は

「たらばがにの姿煮を頼んでいいですか？」

と料理に思いを馳せている。しかし、佐伯は気が気ではなかった。小枝子は、本当に現れるのであろうか。

「来たら、料理をつつけるように、もう頼んで置こうか。亜美ちゃん、好きな料理をどんどん頼んでいいよ。今日は、僕のおごりだからね」

「やったー！」

亜美は素直に喜んでいる。

その時、一瞬、店が華やくだような気がした。小枝子が入ってきたのだ。他の客も振り返っている。佐伯は緊張した。料理で盛り上がっているふたりに、佐伯は

「来たよ」

と合図した。

小枝子は、佐伯に気づいたようだ。

「お待たせ。このおふたりが今日の仲間」

と言ってふたりを見た。なぜか良治があんぐりと口を空けている。亜美も良治の異変に気づいたようだ。

「良治、知っているひと？」

「げっ、なんで、サエゴンがここに居るんだ」

佐伯と亜美を同時に叫んだ。

「サエゴン！」

すると小枝子は

「あれ、吉田良治じゃない。どうしてここに居るの？」

と良治をみて言った。

「小枝子さん。良治君と知り合いなのですか？」

「知り合いも何も無いわよ。わたしのゼミのかつての生徒よ。ねえ、吉田君」

吉田は、急に小さくなっている。

「佐伯さん。申し訳ないが、僕は失礼します」

そう言って、吉田は席を立とうとした。すると、亜美は

「なによ、良治。せっかく来たんだから、食べていこうよ」

と言った。小枝子も

「そうだよ。吉田君。久しぶりにあったんじゃない。今日は盛り上がりよう」

と言っている。良治は

「佐伯さんのマドンナが、まさかサエゴンとは思わなかった。驚きだよ」

「吉田君、そのサエゴンというあだ名はよしてくれない。わたし、あんまり好きじゃないのよ。なにか、怪物みたいじゃん」

佐伯は、意外な展開にとまどっていた。

「吉田君は早智大学の出身なのかい？」

「ええ、理学部物理学科です」

「それが、いまはミュージシャン志望か」

「あれ、吉田君は日本電気工業に入ったんじゃないか？」

と、小枝子は聞いた。

「先生。すいません。音楽への夢捨てきれず、一年で辞めてしまいました」

佐伯は驚いた。

「日本電気工業！半導体で日本一の会社じゃないか。もったいない」

「亜美ちゃんは知っていたの？」

「いえ、知りませんでした。早智大学出身ということも初耳です。良治は高校中退で、音楽の道を目指したって聞いていましたから」

小枝子は

「吉田君は、なんで、そんな嘘をついていたの？」

「まずいな。だから、帰ろうとしたのに」

亜美は、少し怒った顔で良治を見ている。

「ミュージシャン仲間で、大卒というのは格好悪いんですよ。しかも、大企業の中退組じゃ誰も仲間と認めてくれません。だから、大学在学中から、ミュージシャン仲間には、高校中退ということで音楽活動をしていたのです。」

「じゃあ、会社で働いていた時も、音楽活動していたってわけ」

「ええ、結構大変でした。それで、一年で止めてしまったのです」

佐伯は戸惑っていた。小枝子とのデートのはずが、思わぬ方向に話が展開している。亜美は目に涙をためている。かなりショックを受けているようだ。

佐伯は、ふと気づいた。

「ああ、小枝子さん。紹介はまだだったね。こちらは田辺亜美さん。良治君と結婚の約束をしている。ひょんなことから、ふたりと、この店で知り合って、それが縁で、亜美さんには、NTSでアルバイトをしてもらっているんだ」

小枝子は、あらためて亜美を見た。

「吉田君。だめよ。こんな可愛い子を泣かしたら」

「亜美、ごめん。いつかは、本当のことを言おうと思っていたんだけど、なかなか言い出せなかった」

と良治は、亜美に頭を下げた。亜美は、良治を見た。

「だったら、中学校時代から不良で、酒とタバコに浸っていたっていうのも嘘なの」

「ごめん。どちらかというと優等生だった」

再び、良治は亜美に謝った。

亜美はあきれたという顔をしている。

すると、小枝子は亜美の身体を見て言った。

「亜美さん。もしかして、おなかの中に子供が居るの？」

亜美はこっくりとうなずいた。

「吉田君は、どうやって金を稼いでいるの？」

「音楽の方は、演奏させてもらうのが目的だから、ほとんど収入はゼロです。いまは、主に、アルバイトですね。亜美が、佐伯さんの世話でNTSでバイトをしているので、すごく助かります」

小枝子は、良治と佐伯に、少しだけ席をはずすように言った。なにかを亜美に話すらしい。佐伯は

「小枝子さん。乾杯はどうします」

小枝子は、佐伯をにらむと

「後でいいでしょう。ふたりとも十五分だけ席をはずして。それから、吉田君、タバコはだめよ」

と釘をさした。

ふたりは、待合室に移動した。この店では、スペースのゆったりとした待合室が準備されている。すでに、何人かが席が空くのを待っていた。

「良治君は、タバコはいいのかい」

「ええ、この機会に止めようかと思っていました。今日、サエゴンに会ったのがいい機会です。タバコによる受動喫煙は、胎児に悪影響があると聞きました。子供のためにも、きっぱり止めます」

「それで、いいの？」

「実は、もともと、そんなにタバコに未練があるわけではないのです。ミュージシャンは、タバコを吸うものと勝手に決めて、格好つけてただけですから」

「しかし、小枝子さんが良治君の先生とはびっくりだな」

「こちらは、もっとびっくりですよ。まさか、サエゴンが佐伯さんの恋人だったなんて」

「良治君。小枝子さんは、僕の恋人でも何でもいないだ。ついこの間、会ったばかりだからね。いわば、今日が初デートで、もしかしたら最後になるかもしれない」

「そうなんですか」

「ところで、どうして、小枝子さんはサエゴンなんだ」

「権藤小枝子ですよ。名前のサエと、苗字のゴンをとってサエゴンです。実は、権藤先生は、美人で、頭もよくて、実はスポーツ万能なんです。だから、学生にとっては神様のような存在です。敬意と脅威の気持ちをこめて、サエゴンと呼ぶようになりました」

「ふーん。そうか」

「佐伯さん。サエゴンファンはものすごい数ですよ。権藤先生は知らないと思いますが、小枝子先生の独身を守る会というのがあるくらいですから」

「えっ！そんな会があるの？」

「ええ、先生がつきあっている人が居ると、みんなでじゃまをするのです。自分達が相手をできる存在じゃないので、せめて、他人の邪魔をしてやろうというわけです」

「でも、佐伯さんだったら僕は応援します」

「おいおい、それはどういうことなんだ。まさか」

「はい、小枝子先生の独身を守る会、会員番号五六七番です」

佐伯は、思わず笑ってしまった。

「でも、いまは亜美がいますから、今日を最後に、会を脱会します」

「しかし、亜美さんに嘘をついていたのは、まずかったな」

「佐伯さん。ミュージシャンって、結構、格好ええしが多いんです。自分の世界を勝手につくっているというか。ロックをやる人間が、大学の物理を学んで、大手の会社に入っていたなんて格好つかないんですよ」

「そうかな。かえって、そっちの方が格好いい気がするんだけど」

「しょせん、一般人には理解してもらえない世界です」

「ふーん。そんなもんなんだ」

時計を見ると、十五分が過ぎている。

「そろそろ、席に戻ろうか」

良治は、バツが悪そうな顔をしている。佐伯の後ろから、隠れるようにして席に戻った。

「ほら、男どもが帰ってきたわよ」

佐伯は、亜美を見て安心した。いつもの明るい顔に戻っている。

「じゃ、乾杯しようか」

小枝子は、明るい声で言った。佐伯は不思議だった。小枝子は、どんな魔法を使ったのだ

ろうか。三人は生ビールを、そして、亜美はウーロン茶を注文した。ドリンクと一緒に、タイミングよく大きなタラバガニが届いた。これだけで、二万円近くする。亜美は大喜びだ。

小枝子は

「亜美ちゃんには、いちばんおいしい、このはさみのところをあげるわ。」

と言った。

「わあ、先生。ありがとう」

なにか、ふたりは、昔からの友達のような雰囲気だ。

それに対して、良治は元気がない。

「はい、吉田君。どうしたの。亜美ちゃんのはさみの殻をとってあげなきゃだめでしょう。

お父さんになるんだから」

良治は、亜美のために殻を割っている。

「小枝子先生。良治の成績ってどうだったんですか」

と亜美は、小枝子に聞いた。良治は、あわてたように

「先生、やめてください」

すると、小枝子は

「常にトップクラスよ。すごいでしょう」

「ふーん」

と亜美は関心している。

「だったら、おなかの子は、頭がいいかもね」

「そうよ、亜美ちゃん。何でも、前向きに考えなきゃ」

良治が優等生だったということは、佐伯には意外だった。早智大学は、私立大学では日本のトップに位置する。

それから、四人はとりとめのない話をした。いつのまにか、佐伯は、小枝子とのデートということを忘れていた。それが、良かったのかもしれない。もし、変に意識していたら、佐伯は、緊張して何も言えなかつたらう。

小枝子が席をはずすと、亜美が佐伯に言った。

「だめじゃない、佐伯さん。今日は、ふたりの初デートなんでしょう」

「でも、デートと言っても、小枝子さんは気にもとめていないんじゃないかな」

「その辺が、佐伯さんのいいところと、悪いところよ。この後、小枝子先生をどこかに誘ってよ。わたし、小枝子先生の大ファンになっちゃった。でも、佐伯さんなら許してあげる。ねえ、良治」

「なんで俺に聞くんだ」

「だって、小枝子先生の独身を守る会の会員なんでしょ」

良治は、ぎょっとしている。

「なんで、亜美がそんなことを知っているんだ」

そこに、小枝子が戻ってきた。実は、佐伯自身、どうしても、小枝子に聞きたいことがあった。

「それじゃ、ここは、そろそろお開きにしようか」

すると、小枝子も

「あら、もう、こんな時間ね。亜美ちゃんは、帰って休んだ方がいいわ」

亜美は

「今日は、めったに食べられないご馳走を堪能しました。佐伯さん、本当にありがとうございます」

と礼を言った。そして、佐伯に目配せしている。

「小枝子さん。もし、時間があったら、少し話がしたいんですが、どうですか」

小枝子は時計を見た。

「そうね。一時間ぐらいだったら大丈夫です」

と、小枝子は言ってくれた。

亜美は、佐伯にむかって親指を立てた。

佐伯は、小枝子を近くのコーヒー専門店で誘った。もちろん、店内は禁煙である。せっかくの美味しいコーヒーも、タバコの匂いがあると、台無しになる。良治と亜美のふたりはタクシーで帰した。タクシー代は、チップも含めて佐伯が払った。ふたりは遠慮したが、佐伯は譲らなかった。

「今日は、僕のためにご苦労さん。本当だったら、アルバイト料を払いたいくらいの気持ちだよ。本当に助かった」

そう佐伯がお礼を言うと、亜美が耳元で

「佐伯さん。頑張って」

と言って、タクシーに消えた。

おいしいコーヒーの香りが鼻をくすぐる。

「ここは、佐伯さんのお気に入りの店？」

「いえ、前に来た時に、感じのいい店だなと思ったものですから」

「へー。いったい誰と来たの」

佐伯は、ぐっと返答につまった。すると、小枝子は、また、笑った。佐伯は、いつもからかわれているような気がする。

「実は、小枝子さんに、どうしても聞きたいことがあったのです」

「なに、いきなりプロポーズ？」

佐伯は、まじめに反応しそうになったが、すぐに思い直した。また、からかわれている。

「亜美ちゃんのことですよ。どんな魔法を使ったんですか？」

小枝子は、ふっとため息をついた。

「魔法なんかないわ。当たり前のことを話ただけよ」

そう言って、小枝子は話した。

「彼女、妊娠しているでしょう。元気そうに見えるけど、内心は、とても不安だったと思うの。だって、結婚を約束していても、未婚の母であることには、変わらないわ。相手のことを信じていても、もしかしたら裏切るかもしれない。そんな不安な時に、吉田君が自分に嘘をついていたことが分かったら、相当なショックよ」

「そこまでは、なんとなく僕でも分かるのですが、その後、彼女の立ち上がりは、すごく早かったですよね」

「自信をつけさせてあげたの。だって、あんなに素敵な女性じゃない。だから、自信を持ちなさい。あなたは、女性のわたしから見ても、うらやましいくらい魅力的よと言ってあげたの。これは、わたしの本音。嘘じゃ、相手に伝わらないから」

「そうですか」

「それから、吉田君は亜美ちゃんのことを大好きよと言ってあげたの。はたで見れば良く分かるわ。亜美ちゃんに、なかなか本当のことを言えなかったのも、亜美ちゃんのことを、それだけ好きだったからでしょ。おろらく、吉田君もずいぶん悩んだと思うわ」  
確かに、良治は悩んでいたに違いない。

「そして、今回のことは前向きに考えなさいって言ったの。亜美ちゃんの両親が結婚に反対だったのは、相手が、高校も出てない不良のミュージシャンだと思っていたからでしょう。それが、一流大出の優等生だったんだから、ご両親だって喜ぶはずよ。それから、言ったの、吉田君が亜美ちゃんを不幸にしたら、わたしが許さないって」

「はあ」

「なにしろ、吉田君は、わたしの独身を守る会の会員で、ラブレーターまでくれたんですから」

「ラブレーター！」

「ええ、誤字脱字に文法の誤りを添削して、返してあげたけど」

「それを、亜美ちゃんに言ったのですか？」

「もちろん。でも、今では、吉田君は亜美ちゃん一筋だから安心してといったわ。わたしも驚いたけど、やはり、あの若さには適わないわね。だって、肌の肌理が全然、違うんだもの」

佐伯から見ると、小枝子の肌もきらきらしているように思えるが、女性どうしにしか分からない微妙なちがいがあるのかもしれない。

「亜美ちゃんって、もともと明るい性格だと思うの。だから、ちょっとした不安を取り除いてあげたら、すっかり元気になったわ」

それが魔法かと佐伯は納得した。ちょうど、コーヒーのカップが空になるころだった。

「あらこんな時間。それじゃ、わたしは、そろそろ失礼させていただきます」

「それじゃ、小枝子さん。家まで送っていきます」

「あら、ひとり住まいの女性の家まで来て、なにをなさるお積り？」

と、小枝子は言った。佐伯は、返答に困って、もじもじしていると

「佐伯さんは、本当にからかい甲斐がある人ですね」

またやられた。佐伯は思った。

「実は、今夜は、父がクビを長くして、わたしからの電話を待っているの。これ以上遅くなったら、佐伯さん、父にお仕置きされるわよ」

「えっ、社長がですか」

「可愛い娘が、いくらおとなしいとはいえ、飢えた男と一緒に居る。父親としては心配するのも当たり前でしょう」

「おとなしい！飢えた男？」

佐伯は、心の中で反復していた。それは、ないだろう。

「佐伯さん。大丈夫よ。わたし、今日はひとりで帰れるわ。今夜は、とても楽しかった。ありがとうございます」

そう言うと、小枝子は帰っていった。